HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	翻訳と解説形態論：語構造の分析(1)
著者	上野，誠治; UENO，Seiji
引用	北海学園大学人文論集(53)：137-161
発行日	2012-11-30

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

翻訳と解説　形態論：語構造の分析(1)

上　野　誠　治

0．はじめに

本稿は，William O'Grady and Videa de Guzman (2009) *Morphology: the analysis of word structure*. (Chapter 4 in *Contemporary Linguistic Analysis: An Introduction* edited by William O'Grady and John Archibald. Sixth Edition. Toronto: Pearson Education Canada）の全訳である。

Contemporary Linguistic Analysis は世界中で広く使用されている言語学の概説書であり，ここに訳出したのはその中の第 4 章形態論の部分のみである。本稿は，今年度第 1 学期の専門言語学Ⅱで形態論を取り上げ，学生とこの章を読む過程の中から生まれたものである。授業の際，学生の理解を手助けするために加えた解説や説明を脚注に示した。

日本語訳は可能な限り原文の英語に沿ったものになるよう心がけたが，それだけでは自然で分かりやすい訳文とはならないことも少なくない。そのような場合には，必要に応じて，あえて原文にはない文言を加筆した場合がある。ただし，それはないものを付け足したわけではなく，行間に潜んでいるものを英語と日本語の違いを考慮して，言語化したものである。脚注も含め，それは，とりもなおさず，筆者の「読み」であり解釈でもある。的を外していないことを祈ると同時に，大方の叱正を願う次第である。

(目次)

4.1　語と語構造
　4.1.1　形態素
　4.1.2　語構造の分析

4.2　派生
　4.2.1　英語の派生接辞
　4.2.2　２種類の派生接辞
(以下次号)
4.3　複合
　4.3.1　複合語の特性
　4.3.2　内心複合語と外心複合語
　4.3.3　他言語における複合語
4.4　屈折
　4.4.1　英語の屈折
　4.4.2　屈折と派生
　4.4.3　他の屈折現象
4.5　他の形態論的現象
　4.5.1　主に屈折と関連する過程
　4.5.2　他の過程
4.6　形態音素論

１．翻訳と解説

第 4 章　形態論：語構造の分析

ひとつひとつのことばを口から発する前に，それを彫り出せよ。

オリバー・ウェンデル・ホームズ・シニア[1]

1　Oliver Wendell Holmes, Sr. (1809–1894) はアメリカ合衆国の医師，詩人，著述家。同名の息子オリバー・ウェンデル・ホームズ・ジュニアは，法学者。なお，この一節の前には Speak clearly, if you speak at all「仮にも話をするときは，明確に述べよ」とある。したがって，「彫り出せよ」とは，あたかも原石からことばを切り出すかのように，きちんと形を整えてから発言することの重要性を述べているものと思われる。

(画像：http://www.cyberhymnal.org/bio/h/o/l/holmes_ow.htm)

言語にとって，語よりも重要なものは一切ない。単に音の要素である音素（phoneme）や音節（syllable）とは異なり，語は意味を担う。また，必要に応じて作られ廃棄される文とも異なり，語は永遠に話者の心的辞書すなわち**レキシコン**（lexicon）の中に蓄積されている。語は，ほぼ間違いなく，コミュニケーションの基本要素（fundamental building blocks）である。

平均的な高校生であれば，おおよそ 6000 の基本的な語についての知識を持っていよう。そこには，*read*，*language*，*on*，*cold*，*if* のような，その形式と意味が他のなにものからも予測できないような語が含まれる[2]。その一方で，さまざまな要素に一般的な規則を適用することで構成され理解されうるような数え切れないほどの語もある。たとえば，動詞 *phish*（「電子メールを介して不正に機密情報を入手する」の意）を知っている英語話者であれば誰でも，*phished* がその過去形であることを認識し，*phisher*，*phishing*，*unphishable* のような語を構成し解釈することができる[3]。

言語学者は**形態論**（morphology）という用語を使って，語や語形成に関係する文法の一部に言及する。以下で見ていくように，形態論の研究によって，言語がどのように機能するのかという問いに対して重要な洞察が与えられ，また，語のさまざまな範疇の必要性，語の内部構造の存在，語を様々な方法で作り出し変形する操作の存在が明らかとなる[4]。

2　これらが，ひとつの形態素からなる語であるということ。つまり，これ以上分割できない語であるということ。

3　*phishing* は，いわゆる「フィッシング詐欺」のことで，インターネット上で他人の銀行口座の情報や暗証番号などを盗んで使うことを指す。*Oxford English Dictionary Online* や *Wikipedia* によれば，被害者が餌に食いつく魚釣り（fishing）のイメージと phone phreak（「（電子装置を用いて）電話回線を無料で使用する人」『ランダムハウス英和大辞典』第 2 版．小学館）の *ph-* からの造語。

4　たとえば，*happiness* という語は，*happy* と *-ness* から構成されるが，その 2 つが結合する際，*happy* の *y* は *i* に変形される。

ことばの問題　英語にはいくつの語があるか

『オックスフォード英語辞典』(*The Oxford English Dictionary*，全20巻)は，「世界中で過去から現在にかけて使われたあらゆる種類の英語において，ある語に関するあらゆる周知の用法や変異形を記録しようと試みている」辞書で，そこには総計で616,500語が収録されている。しかし，常に最新でいられる辞書はあり得ない。なぜなら，新しい語や，古い語の新しい用法が，その間ずっと英語に追加されていくからである。オンライン版の『アーバン・ディクショナリー』(*Urban Dictionary*，www.urbandictionary.com)などは，毎日数百もの新しい定義を追加している[5]。

4.1　語と語構造

われわれは英語の話者であるから，言語音（speech sound）の流れを分割したり，文を書くときにどこにスペースをおいたらよいか決めることに苦労するようなことは滅多にない[6]。そもそも，語とは何か。

言語学者が定義する**語**（word）とは，言語に見られる最小の**自由形式**（free form）のことである[7]。それは単に，隣接する要素に関して定位置に生起する必要がない要素のことである[8]。多くの場合，それは単独で現れる

5　投稿式のオンライン俗語辞典。トップページにはUrban Dictionary is the dictionary you wrote. と書かれており，誰でも書き込むことができる。

6　英語母語話者を読者に想定した概説書なので,「われわれは英語の話者なので」という言い方になっている。

7　「『決して単独では話されることのない形式』が拘束形式（bound form）であり，それ以外の形式が自由形式である。」(田中春美(1988)『現代言語学辞典』東京：成美堂，p.228）いわゆる自由形態素（free morpheme）は，自由形式の一つ。また，拘束形態素は拘束形式の一つ。

8　対照的に，定位置に生起する必要がある要素とは，たとえば複数を表す標識 *-s* などである。この接辞は，必ず名詞の右隣に付加されなければならない。

こともできる。たとえば，以下の文を考えてみよう。

(1)　Dinosaurs are extinct.（恐竜は絶滅した。）

ここで，*dinosaurs* は語であるが，複数を表す標識 *-s* の方はそうではないという直感を，われわれはみな共有している。しかし，それは何故か。ここで観察される重要なことは，*-s* が自由形式ではないという点である。すなわち，それは単独で生起することは決してないし，それが結合している名詞から分離することもできない（別の範疇に付加されなければならない要素をここでは，ハイフンを用いて表記する）。

(2)　*Dinosaur are -s extinct.

対照的に，*dinosaurs* が語であるのは，以下の例にあるように，単独で，しかも文の中のさまざまな位置に生起することができるからである。

(3)　話者A：What creatures do children find most fascinating?
（子ども達はどんな生き物にもっとも惹かれるかな。）
話者B：Dinosaurs.
（恐竜だよ。）

(4)　a．Paleontologists study *dinosaurs*.
（古生物学者は恐竜を研究する。）
b．*Dinosaurs* are studied by paleontologists.
（恐竜は古生物学者によって研究される。）
c．It's *dinosaurs* that paleontologists study.[9]
（古生物学者が研究するのは恐竜である。）

9　(4 b) は受動文，(4 c) は分裂文（cleft sentence）あるいは強調構文（emphatic sentence construction）。

Are のような語は，通常，単独で生起することはない[10]。にもかかわらず，それらは自由形式である。なぜなら隣接する語に関して，その位置がまったく固定されているわけではないからである。次の例に示されるように，*are* は疑問文の場合，文頭に生起できる。

(5)　*Are* dinosaurs extinct?（Dinosaurs are extinct? と比較せよ）

4.1.1　形態素

音節や文と同様，語は内部構造を持ち，それは一定の方法で相互に有機的に結びつけられる，より小さな単位から構成されている[11]。語構造における最も重要な単位は**形態素**（morpheme）であり，それは意味や機能に関する情報を担う，言語の最小単位である。たとえば，*builder* という語は2つの形態素からなる。すなわち，*build*（「建設する」の意）と *-er*（語全体が「建てる人」という意味を持った名詞として機能することを示す）である。同様に，*houses* という語は *house*（「住居」の意）と *-s*（「1つより多い」という意）という2つの形態素から作られている。

なかには単一の形態素からなる語も存在する。たとえば，*train* という語は，その意味や機能に関する情報を担う，より小さな部分（たとえば，*tr* と *ain*，とか *t* と *rain* など）に分解することはできない。このような語は**単純語**（simple word）と呼ばれ，複雑語とは区別される。**複雑語**（complex word）とは2つ以上の形態素を含む語のことである（表4.1参照）[12]。

10　(3)における話者Bの回答のように，dinosaurs は単独で生起できるが，are はそのような形での生起はできない。

11　「より小さな単位」とは「（語）より小さな単位」のことであり，すなわち形態素を指す。

12　complex word は，複数の形態素からなる，文字通り「複雑な語」のことである。定義上は，複合語（compound word）もその範疇に含まれ得るが，表4.1に挙げられている例がいずれも派生語（derived word）であることからも明らかなように，ここでは派生語と同義であろう。したがって，複合語と訳すのは不適切である。

表 4.1　2 つ以上の形態素からなる語

1 形態素	2 形態素	3 形態素	4 以上の形態素
and			
couple	couple-s		
hunt	hunt-er	hunt-er-s	
act	act-ive	act-iv-ate	re-act-iv-ate

自由形態素と拘束形態素

それ自体で語になり得る形態素は，**自由形態素**（free morpheme）と呼ばれる。たとえば，*boy* という形態素は自由形態素である。なぜなら，それ自体で語として使うことができるからである。一方，*-s* は拘束形態素である。

自由形態素によって表される概念は，英語と他の言語では必ずしも同一の位置づけを持つとは限らない。たとえば，ヘア語（Hare，カナダのノースウェスト準州で話されるアサバスカ語（Athabascan）の 1 つ）では，表 4.2 に示されているように，身体部位を示す形態素は常にその所有者を示す形態素に付加されなければならない（補助記号 ´ は高音調（high tone）を示す）。

表 4.2　ヘア語における身体部位名[13]

所有者なし		所有者つき	
*fí	「頭」	sefí	「私の頭」
*bé	「腹」	nebé	「私の腹」
*dzé	「心臓」	ʔedzé[14]	「誰かの心臓／ある心臓」

もちろん英語では，身体部位名は自由形態素であるから，別の要素に付加される必要はない。

13　星印*（asterisk）は，それが非文法的であることを示す。したがって，単独で fí とは言えない。その場合，所有者を示す「私の」という意味の se と結合させて sefí と表現する必要がある。

14　ʔ は無声声門閉鎖音（voiceless glottal stop）。

逆に，英語では拘束形式であるが，他の言語では自由形式となる場合もある[15]。たとえば，「過去（past）」や「完了（completed）」という概念は英語では拘束形態素 *-ed* によって表される（*I wash*ed the car「私はその車を洗った」や *a wash*ed car「洗車された車」のように）が，タイ語では自由形態素 *lɛɛw* によって表される。次の例が示すように，この形態素はある語が介在することによって動詞から分離させることもできる[16]（ここでは，音調は示されていない）。

(6) Boon thaan khaaw lɛɛw.
Boon eat rice past
'Boon ate rice.'（「ブーンはご飯を食べた。」）

異形態

ある形態素の変異形（variant form）はその**異形態**（allomorph）と呼ばれる。英語には不定（indefiniteness）を表すために使われる形態素は 2 つの異形態を持つ―すなわち，母音で始まる語の前につく *an* と子音で始まる語の前につく *a* である。

(7)

an orange	a building
an accent	a car
an eel	a girl

ついでながら，*an* と *a* のいずれを用いるかの選択はつづりではなく発音に基づいて決定されることに注意されたい。その結果，*an M.A. degree*「修

15　脚注 7 参照。

16　タイ語の lɛɛw は動詞の「過去」を表す形態素で，英語の -ed に相当する。-ed を動詞から分離して別の位置に置くことは不可能である。たとえば，*Boon eat rice -ed.

士号」，*a U.S. dollar*「アメリカドル」という言い方になるのである[17]。

次の例が示すように，複数形態素 *-s* の発音に，もう一つの異形態変異が見られる。

(8) cats
dogs
judges

第 1 例で複数形態素は/s/，第 2 例では/z/，第 3 例では/əz/となる。この場合もまた，適切な異形態の選択は音韻的事実に依存する（この事に関して詳細は，4.6 節参照）。

さらに，*permit*/*permiss-ive*，*include*/*inclus-ive*，*electric*/*electric-ity*，*impress*/*impress-ion* などの一対の語にも，もう一つの異形態変異が見られる。これらの語を声に出して言ってみれば，最初の方の形態素の末尾子音に接尾辞が付加されると，その発音が変化することに気づくだろう[18]。

ここでつづりの変化と異形態変異を混同しないことが重要である。たとえば，*create* や *ride* のつづりに見られる末尾の *e* は *creat-ive*，*rid-ing* では落ちるが，これは異形態変異ではない。なぜなら，ここには発音上の変化が見られないからである。他方，*electric*/*electric-ity* や *impress*/*impress-ion* の場合には，異形態変異がある。この場合，つづりは変わらずとも，最初の方の形態素の発音が変化している。

17　M. A. は，つづりではMという子音から始まるが，発音は［èméi］となるので母音で始まる語である。一方，U. S. の発音は［jùːés］であり，［j］はいわゆる半母音であるが，硬口蓋接近音という子音である。

18　permit［t］/permiss［s］-ive, include［d］/inclus［s］-ive, electric［k］/electric［s］-ity，impress［s］/impress［ʃ］-ion のように，［t］→［s］，［d］→［s］，［k］→［s］，［s］→［ʃ］と変化している。

4.1.2　語構造の分析

語の内部構造を表示するためには，個々の成分形態素を特定するばかりか，それらがより大きな語の意味と機能にいかなる貢献をしているかという観点から分類することも必要である。

語根と接辞

複雑語は典型的に，**語根**（root）となる形態素と 1 つ以上の**接辞**（affix）から構成される[19]。語根は語の中核を構成し，意味の主要成分を担う。また，典型的に，語根は名詞（N），動詞（V），形容詞（A），前置詞（P）といった**語彙範疇**（lexical category）に属する[20]。

ことばの問題　語の範疇を見つけ出すのは難しい？

ここにいくつかの経験則（rules of thumb）がある。

- 名詞は典型的に人や物を指す（citizen，tree，intelligence など）
- 動詞はどちらかというと行為，感情，状態を示す（depart，teach，melt，remain など）
- 形容詞は通常，特性を述べる（nice，red，tall など）
- 前置詞は一般に空間的関係を言語化する（in，ner，under など）

第 5 章 5.1.1 節でこれらの範疇についてさらに詳しく考察する。

語根とは異なり，接辞は語彙範疇には属さず，常に拘束形態素である。たとえば，接辞 *-er* は *teach* のような動詞と結合し，「教える人」という意味の名詞を作る拘束形態素である。この語の内部構造は図 4.1 のように表示することができる（‘Af’ という記号は接辞を表す）。

19　複雑語（complex word）については，6 頁の記述および脚注 12 参照。

20　従来の品詞は，語彙範疇と機能範疇（functional category）に分類される。したがって，語彙範疇は品詞の下位範疇。

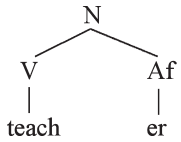

図 4.1　teacher の内部構造

さらにいくつかの内部構造の例を，図 4.2 に示す。

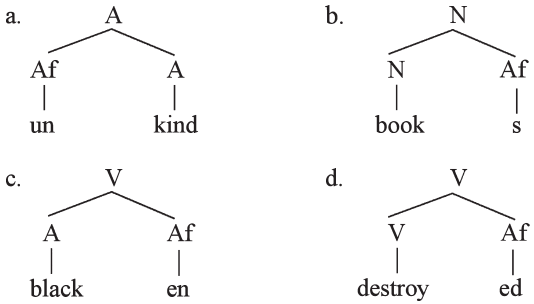

図 4.2　語根と接辞からなる内部構造を持つ別の語

図 4.1 と図 4.2 における構造図は，しばしば**樹形図**（tree (diagram)）と呼ばれる。樹形図によって表される情報は，**標示付き括弧付け**（labelled bracketing）を用いることによっても表示することができる―*unkind* に対しては $[_{A}[_{Af}$ un$][_{A}$ kind$]]$，*books* に対しては $[_{N}[_{N}$ book$][_{Af}$ s$]]$（しかし，この表示は判読しづらいので，本章では一般に樹形構造（tree structure）を用いることにする）。ある語の構造の詳細が考察中の事項に無関係である場合には，たとえば，*un-kind* や *book-s* などのように，形態素の境界位置のみを示す一層単純な表示体系（system of representation）を用いるのが伝統的なやり方である。

語基

語基 (base) とは，接辞が付加される側の形式のことである[21]。多くの場合，語基は語根でもある。たとえば，*books* において，接辞 *-s* が付加される要素は，その語の語根と一致する[22]。しかし，それ以外の場合で，語基の方が，常に単一の形態素である語根よりも大きくなる可能性もある。それは *blackened* のような語で起こる。この場合，過去時制を表す接辞 *-ed* は動詞の語基 *blacken* に付加されているが，*blacken* は語根となる形態素 *black* と接尾辞 *-en* からなる単位である。

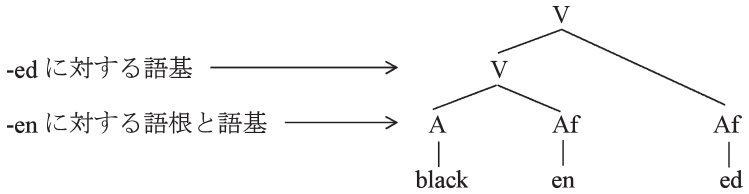

図 4.3　語根と語基の相違を示す語

この場合，*black* は語全体にとっての語根であり，かつ *-en* に対する語基でもある。他方，*blacken* は単に *-ed* に対する語基でしかない。

接辞の種類

語基の前に付加される接辞が**接頭辞** (prefix) と呼ばれるのに対して，語基の後に付加される接辞は**接尾辞** (suffix) と名付けられている。英語では，表 4.3 に示されるように，どちらの種類の接辞も生起する。

21　base は「基体」とも訳される。

22　語根は本文に「常に単一の形態素」と書かれているように，すべての接辞を取り去ったものである。したがって，books から接辞 -s を取り去ったあとの book は語根である。同時に，book は接辞 -s が付加される相手であるから，語基でもある。

表 4.3　英語の接頭辞と接尾辞

接頭辞	接尾辞
de-activate	faith-*ful*
re-play	govern-*ment*
il-legal	hunt-*er*
in-accurate	kind-*ness*

4.2.1 節と 4.4.1 節では，より詳細に，英語における接辞の本質と特性について考察する。

接頭辞や接尾辞に比べてはるかにまれなものに**接中辞**（infix）がある。それは一種の接辞であり，別の形態素の内部に生起するものである。表 4.4 の資料は，フィリピンのタガログ語（Tagalog）に見られる接中辞 -*in*- の例である。それは完了した出来事を表すために，語根の最初の子音の後に挿入される[23]。

表 4.4　タガログ語の接中辞-in-の例

語基[24]	接中辞形（*infixed form*）		
bili	「買う」	b-*in*-ili	「買った」
basa	「読む」	b-*in*-asa	「読んだ」
sulat	「書く」	s-*in*-ulat	「書いた」

入門期の学生は時々，*boy-ish-ness* における -*ish* のような形態素が，他の 2 つの形態素（*boy* と -*ness*）の間に生起することから，それを接中辞と考えてしまうことがあるが，これは正しくない。ある接辞が接中辞であるためには，それは（タガログ語の -*in*- が *sulat*「書く」の内部に生起する場合のように）別の形態素の内部に生起しなければならない[25]。しかし，このようなことは -*ish* の場合には一切起こっておらず，それは単に 2 つの形態素

23　接中辞は挿入辞と呼ばれることもある。

24　直前に「語根の最初の子音の後に」と述べられているが，ここの語基は語根でもある。

25　s-in-ulat は，sulat という 1 つの形態素の内部に接中辞 -in- が生起しているが，boy-ish-ness では，-ish が単に boy と -ness という 2 つの形態素に挟ま

の間に生起しているに過ぎない。

非常に特殊な接中辞の体系がアラビア語（Arabic）や他のセム語族(Semitic)の言語に見られる[26]。これらの言語では，典型的な語根は 3 つの子音だけから成り，その際，種々の文法的な相違を表現するために，子音間に挟まれる母音を含め，さまざまな母音の組み合わせが付加される（以下の例では，語根の分節音（segment）は太字で書かれている)。

(9)　**k**a**t**a**b**a　　**k**u**t**i**b**　　a**k**t**u**b
「書く」　「書かれた」　「書いている」

このような語の構造を表示する一つの方法は，以下のように，語根と，実際にその語が発音されるときに挿入される接辞的な母音（affixal vowel)を，構造の異なる**層**(tier)，すなわち階層に割り振るというものである。

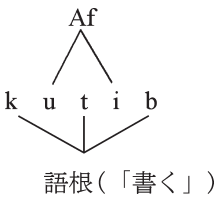

図 4.4　アラビア語における接中辞語(infixed word)の構造を表すための 2 層表示

れているに過ぎない。また，-ish は，boy-ish のように語末にも生起できるので，接中辞ではなく接尾辞である。

26 「セム語族の言語」とはアフロ・アジア語族に属する諸言語のことで，アラビア語の他，エチオピア語，アラム語，ヘブライ語，アッカド語などが含まれる。

厄介な事例

英語における複雑語の大多数は，自由形態素の語根から作られる[27]。たとえば，*re-do* や *treat-ment* のような語では，語根それ自体（それぞれ，*do* と *treat*）が語としても使うことが可能である。英語では，ほとんどの複雑語がこのような仕組みを持つので，英語形態論は**語基盤的**（word-based）と言われる。

しかし，すべての言語がこの種の語形成の仕組みを持つわけではない。たとえば，日本語やスペイン語では，動詞の語根は常に拘束形態素であり，したがって単独で生起することはできない。スペイン語の *camin*，日本語の *arui* などは語ではない[28]。

⑽　a．スペイン語

camin-ó　　**escuch**-ó　　**limpi**-ó

歩く-過去　　聞く-過去　　拭く-過去

b．日本語

arui-ta　　**kii**-ta　　**hui**-ta

歩く-過去　　聞く-過去　　拭く-過去

英語にも非常に多くの拘束形態素の語根が存在する。たとえば，*unkempt* という語は，たとえ *kempt* が単独では用いられないにしても，（「（〜で）な

27　複雑語に関しては，注 12 参照。

28　「語ではない」ということは，自由形態素ではないということ。したがって，拘束形態素になる。日本語の「歩く」は，以下のように活用すると考えると，語根は aruk の部分ということになる。

aruk-*anai*，aruk-*imasu*，aruk-*u*，aruk-*eba*，aruk-*e*

日本語は開音節言語であるから，k のような子音で終わる形態素は自立的な語ではない。したがって，拘束形態素という分類になる。なお，本文で言及されている arui は「て・た」に続く場合の連用形で，aruk のイ音便形である。

い」という意味を持つ）接頭辞 *un-* と（「きちんと手入れのされた」を意味する）語根 *kempt* から構成されているように思われる。かつては英語に（「櫛で梳かした」という意味の）*kempt* という語があり，元々はこの語基に接辞 *un-* が付加されたのであった。しかし，後に *kempt* は英語から消失し，接辞が拘束形態素の語根とともに現れる *unkempt* という語をあとに残した[29]。

拘束形態素の語根を持つさらに別の語が，語のかたまりとして英語に借用された場合もある。たとえば，*inept* はラテン語の *ineptus*（「適さない」）に由来し，かつてはそれと *apt* という語との関係は明白であったかもしれない[30]。しかし，今見ると，接頭辞と拘束形態素の語根から構成されているようにも思われる。

ことばの問題　ことば遊び

以下の文章はジャック・ウィンター（Jack Winter）が書いた「どのように妻と出会ったか」というユーモラスなエッセーからの抜粋であるが，ある英語の語根が拘束形態素であるために語としては使えないという事実を利用したものである[31]。

I was **furling** my **wieldy** umbrella for the coat check when I saw her standing alone in the corner. She was a **descript** person, a woman in a state of total **array**. Her hair was **kempt**, her clothing **shevelled**, and she moved in a **gainly** way.

（『ザ・ニューヨーカー』1994年7月25日より）

（クロークに預けるために自分の扱いやすい傘を畳んでいたとき，彼女が角の所に立っているのを見たんだ。彼女はひときわ目立っていて，しかもきちんとした身なりをしている女性だった。髪の手入れが行き届き，服装もきちんとしていて，それは上品な振る舞いだったよ。）

29　消失したとは言っても，実際には kempt を語彙項目として掲載している辞書もある。ただし，その場合，一旦消失したあとに，*The American Heritage Dictionary of the English Dictionary*, 3rd. ed. が指摘するように，un-kempt から逆成（backformation）によって再び形成された可能性もある。

形態論的な分析にとって厄介なもう一つの語類に，*receive*，*deceive*，*perceive* または *permit*，*submit*，*commit* のような語彙項目（item）がある。これらの語彙項目は語のかたまりとしてラテン語から（たいていはフランス語経由で）英語に借用されたものである。それらを構成する成分音節（component　syllable）には特定できる独自の意味があるわけではない[32]。たとえば，*receive* の *re* には，*redo* の場合に見られる「再び」という意味はない。また，*-ceive* や *-mit* にも何ら明確な意味を付与することはできない。以上の理由から，これらの語の部分（パーツ）は，時によって構造上の単位のような振る舞い（*receive* や *decieve* の *ceive* は *receptive* と *deceptive* で *cept* となるが，*submit* や *permit* の *mit* は *submissive* と *permissive* では *miss* となる）を示すにしても，われわれは形態素とは扱わないことにする。

4.2　派生

派生（derivation）は，語基とは異なる意味や範疇を持った語を形成する接辞付加（affixation）の過程である。英語におけるもっとも一般的な派生接辞（derivational affix）の一つは，接尾辞の *-er* である。それは表 4.5 に示されているように，動詞と結合して，「Xするひと」という意味の名詞を形成する（この接辞と，*Quebecer*「ケベック州の住民」や *islander*「島民」のような場合の名詞に適用される *-er*，あるいは *taller* や *smarter* のよ

30　*ineptus* ← *in*＋*aptus*（「適した」）

31　太字の語は，日常この形で用いられることはそう多くないと考えられるが，このエッセーではそれをあえて使っているところがユニークで面白い。どの辞書にも載っているのは，否定の接頭辞が付加された形である。unfurl「広げる」，unwieldy「扱いにくい」，nondescript「目立たない」，disarray「服装の乱れ」，unkempt「髪が梳かしていない」，dishevelled「服装がだらしない」，ungainly「優美でない」。ただし，脚注 29 で指摘したように，kempt などを掲載している辞書も実際にはある。

32　成分音節とは，たとえば receive を構成する 2 つの音節（re-と-ceive）のこと。

うな場合の形容詞と結合する *-er* を混同してはならない[33])。

表 4.5　-er 接辞

動詞語基	派生名詞（resulting noun）
sell	sell-er
write	writ-er
teach	teach-er
sing	sing-er
discover	discover-er

派生によって形成される語は図 4.5 に例示されるような種類の内部構造を示す。

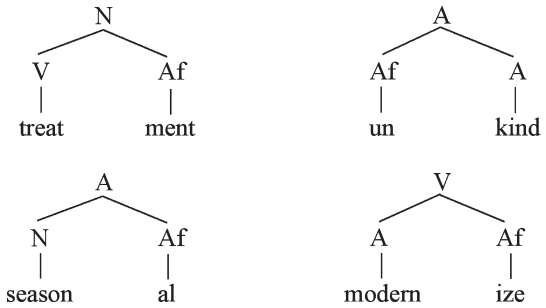

図 4.5　派生によって形成される語

これらの各構造において，接尾辞または接頭辞は特定の種類の語基と結合し新たな語を形成する。たとえば，*seller* の場合，接尾辞 *-er* は動詞 *sell* と結合し名詞 *seller* を形成する。*unkind* の場合は，接頭辞 *un-* が形容詞 *kind* と結合し元とは異なる意味を持った新たな語を形成する，といった具合である。

派生語（derived word）は，一旦形成されると，独立した語彙項目とな

33　たとえば，Quebecer の Quebec はそもそも動詞ではないので，「Xする」という意味は持ち得ない。

り，話者の心的辞書の中に独自に登録されるようになる。そして時の経過とともに，成分形態素（component morpheme）からは予測できない特殊な意味をしばしば帯びることがある[34]。たとえば，*writer* という語は単に書くことができる人ではなく，生計のためにものを書く人を表すためにしばしば使われる（例　*He's a writer.*「彼は作家です」）。（第 1 音節に強勢が置かれた）*comparable* は「比較されうる（able to be compared）」というより「類似した（similar）」を意味する。*profession* は通常，公言する行為（act of professing）というより職業（career）を表す。

4.2.1　英語の派生接辞

表 4.6 には，英語の派生接辞の一部が列挙されている。また，それらが通常結合する際の語基（ここでは拘束形態素の語根は無視する）の範疇と新たな派生語の範疇に関する情報も併記してある[35]。表の最初の記載事項は接辞 *-able* が動詞の語基に適用し，それを形容詞に変換することを述べたものである。たとえば，接辞 *-able* を動詞 *fix* に付加すると，（「固定できる（able to be fixed）」という意味の）形容詞が得られる。

表 4.6　英語の派生接辞

接辞	変化	例
接尾辞		
-able	V→A	fix-able，do-able，understand-able
-al	V→N	refus-al，dispos-al，recit-al
-ant	V→N	claim-ant，defend-ant
-(at)ion	V→N	realiz-ation，assert-ion，protect-ion
-er	V→N	teach-er，work-er
-ing$_1$	V→N	the shoot-ing，the danc-ing
-ing$_2$	V→N	the sleep-ing giant，a blaz-ing fire
-ive	V→A	assert-ive，impress-ive，restrict-ive

34　成分形態素とは，たとえば writer を構成する 2 つの形態素（write と-er）のこと。基本的には，脚注 32 の成分音節に相当する。

35　たとえば，V→A の場合，当該の接辞は動詞（V）と結合し，その結果生じる派生語の範疇は形容詞（A）となる。

-ment	V→N	adjourn-ment，treat-ment，amaze-ment
-dom	N→N	king-dom，fief-dom
-ful	N→A	faith-ful，hope-ful，dread-ful
-(i)al	N→A	president-ial，nation-al
-(i)an	N→A	Arab-ian，Einstein-ian，Albert-an
-ic	N→A	cub-ic，optimist-ic，moron-ic
-ize$_1$	N→V	hospital-ize，crystal-ize
-less	N→A	penni-less，brain-less
-ous	N→A	poison-ous，lecher-ous
-ish	A→A	green-ish，tall-ish
-ate	A→V	activ-ate，captiv-ate
-en	A→V	dead-en，black-en，hard-en
-ity	A→N	stupid-ity，prior-ity
-ize$_2$	A→V	modern-ize，national-ize
-ly	A→Adv	quiet-ly，slow-ly，careful-ly
-ness	A→N	happi-ness，sad-ness
接頭辞		
anti-	N→N	anti-abortion，anti-pollution
ex-	N→N	ex-president，ex-wife，ex-friend
de-	V→V	de-activate，de-mystify
dis-	V→V	dis-continue，dis-obey
mis-	V→V	mis-identify，mis-place
re-	V→V	re-think，re-do，re-state
un$_1$*-*	V→V	un-tie，un-lock，un-do
in-	A→A	in-competent，in-complete
un$_2$*-*	A→A	un-happy，un-fair，un-intelligent

（注）接尾辞とは異なり，英語の接頭辞は語基の範疇を換えない。

時に，接辞が付加される語基の範疇を決定することが難しい場合がある。たとえば，*worker* の場合，その語基（*work*）はあるときは動詞として（*they work hard*「彼らは一生懸命に働く」のように），またあるときは名詞として（*the work is time-consuming*「その仕事は時間がかかる」のように）使われるからである。では，これらの形式のどちらが *-er* に対する語基の働きをしているのか，ということはどのように分かるのであろうか。解決の鍵は，*teacher* や *writer* のような，明白に語基の範疇が決定されうる語を見

つけ出すことである。*teach* や *write* は動詞でしかあり得ないので，*worker* という語においても *-er* が結合する語基は動詞であると推測できるのである。

複雑な派生

派生の操作は複数回適用できるので，以下の例のように，多階層の語構造を作り出すことが可能である。

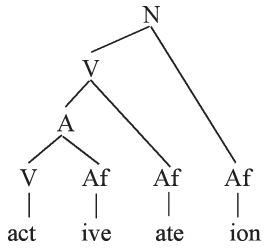

図 4.6　多階層内部構造を持つ語

activation という語はいくつかの層からなる構造を持ち，各層は接辞が適切な語基と結合した結果を反映している。第 1 層では，接辞 *-ive* が動詞の語基 *act* と結合し形容詞を与える（表 4.6 で指摘したように，*-ive* は動詞を形容詞に変換する種類の接辞である）。第 2 層では，この形容詞に接辞 *-ate* が結合し，それを動詞（*activate*）に変換する。この段階になって接辞 *-ion* が付加され，その動詞を名詞に変換し，*activation* という語を与える。

時に，複雑語の内部構造がそれほど明確ではない場合がある。たとえば，*unhappiness* という語は一見すると図 4.7 に示されるいずれの方法でも分析可能である。しかし，接辞 *un-* と *-ness* の特性を考慮と，4.7 b ではなく 4.7 a の分析を支持するような論拠を見いだすことができる。ここで重要となる観察は，表 4.7 に示されるように，接頭辞 *un-* は形容詞とはきわめて自由に結合するのに対して名詞とは結合しないという点である。

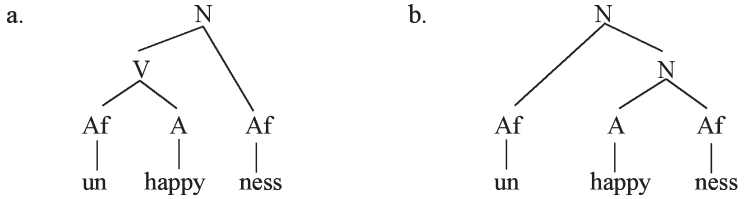

図 4.7　unhappiness という語に想定される 2 つの構造

表 4.7　接頭辞-un	
un＋A	un＋N
unable	*unknowledge
unkind	*unhealth
unhurt	*uninjury

このことは，図 4.7 a に描かれているように，形容詞 *happy* が接尾辞 *-ness* によって名詞に変換される前に *un-* と結合しなければならない，ということを示唆するものである。

対照的に，*unhealthy* のような語では，接尾辞が語根に付加された**あと**でなければ，接頭辞 *un-* を付加することはできない。*-y* が名詞を形容詞に変換することで，*un-* が結合可能な範疇の語を作るからである（図 4.8 参照）[36]。

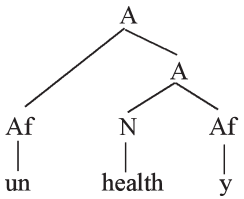

図 4.8　unhealthy の構造

36　結合可能な範疇とは，この場合，形容詞である。

派生に課せられる制約

派生はしばしば特殊な制約や制限に従う。たとえば，接尾辞 *-ant*（表 4.6 参照）は *assist* や *combat* のようなラテン語起源の語基とは結合できるが，*help* や *fight* のような英語本来語起源の語とは結合できない。たとえば，*assistant* や *combatant* のような語は見いだせるが，**helpant* や**fightant* のような語はない。

時に，派生接辞が特定の音韻特性を持つ語基にのみ付加できることがある。その良い例に接尾辞 *-en* がある。それはいくつかの形容詞と結合でき，表 4.8 に示されるような使役の意味（causative meaning）を持った動詞を作る（*whiten* はおおよそ「白くなるようにさせる」を意味する）。

表 4.8　-en の使用に課せられる制約

容認可能	容認不可能
whiten	*abstracten
soften	*bluen
madden	*angryen
quicken	*slowen
liven	*greenen

ここに例示された相違は，*-en* が阻害音（閉鎖音，破擦音，摩擦音）で終わる単音節の語基とのみ結合できるという事実を反映するものである[37]。たとえば，それは単音節語で且つ阻害音で終わる *white* には付加できる。しかし，2 音節からなる *abstract* や阻害音で終わらない *blue* には付加することができない。

37　阻害音（obstruent）は，閉鎖音（stop），破擦音（affricate），摩擦音（fricative）の総称で，共鳴音（sonorant）に対する。妨げ音とも訳される。表 4.8 の容認可能な例に当てはめると，white，soft の［t］，mad の［d］，quick の［k］は閉鎖音，live の［v］は摩擦音である。

4.2.2　2 種類の派生接辞

一般的に，英語では 2 種類の派生接辞が区別される。**第 1 類の接辞**（Class 1 Affixes）はしばしば語基の子音分節音や母音分節音の変化を引き起こし強勢配置（stress placement）に影響を与える可能性がある。さらに，それらは，以下の表 4.9 の最後の例のように，しばしば拘束形態素の語根とも結合する。

表 4.9　第 1 類の接辞が与える典型的な影響

接辞	例	接辞によって引き起こされる変化
-ity	san-ity	語基の母音が/e/から/æ/に変わる（*sane* 参照）[38]
	public-ity	語基の最後の子音が/k/から/s/に変わり，強勢が第 2 音節に移動する（*públic* 対 *publícity* 参照）。
-y	democrac-y	語基の最後の子音が/t/から/s/に変わり，強勢が第 2 音節に移動する（*démocrat* 対 *demócracy* 参照）。
-ive	product-ive	強勢が第 2 音節に移動する（*próduct* 対 *produ̱ctive* 参照）。
-(i)al	part-ial	語基の子音が/t/から/ʃ/に変わる（*part* 参照）
-ize	pulic-ize	語基の子音が/k/から/s/に変わる（public 参照）
-ion	nat-ion	語基の子音が/t/から/ʃ/に変わる（native 参照）

対照的に，**第 2 類の接辞**（Class 2 Affixes）は傾向として音韻的に中立で，語基の分節音の構成や強勢配置には何ら影響を与えない（表 4.10 参照）。

表 4.10　典型的な第 2 類の接辞

接辞	例	接辞によって引き起こされる変化
-ness	prompt-ness	なし
-less	hair-less	なし
-ful	hope-ful	なし
-ly	quiet-ly	なし
-er	defend-er	なし
-ish	self-ish	なし

38　本書で用いられている発音記号で表記すると，sane[sé̱jn]，sanity[sǽ̱nəti] となる。

以下の例が例証を助けてくれるが，第２類の接辞は通常，語根と第１類の接辞の間に介在することはできない。

(11)	relat-ion-al	divis-ive-ness	*fear-less-ity	fear-less-ness
	語根　1　1	語根　1　2	語根　2　1	語根　2　2

第２類の接尾辞が第１類の接尾辞に後続される場合を除き，第１類と第２類の接辞のすべての組み合わせが英語の語に見られることに注意されたい[39]。

（以下，次号）

39　*fear-less-ity が「第２類の接尾辞が第１類の接尾辞に後続される場合」すなわち第２類の接尾辞のあとに第１類の接尾辞が続く時の例である。